

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】「全学共通科目」は、教養教育のコアとされているにもかかわらず、必要単位数は学部により幅があり（0単位から20単位まで）、文学部、外国語学部、法学部、経営学部、環境創造学部では、教養教育のカリキュラムバランスの観点から検討が期待される。					
点検・評価問題点	「全学共通科目」について文学部内の学科間においても必要単位数に幅がある。					
改善方策	3-8-13(新規)「全学共通科目」について文学部において必要単位数、および共通受講科目を決める。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
					→	
2010年度実施計画		達成時期	2010年度取り組み結果			
なし			A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。			
2011年度実施計画		達成時期	2011年度取り組み結果			
文学部教務委員会(カリキュラム委員会改組)で問題点の検証と、解決案を検討する。		2011.12	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 大学執行部の方針との調整を行っており、文学部としての原案は未確定である。			
2012年度実施計画		達成時期	2012年度取り組み結果			
教務委員会で、新カリキュラム案を作成する。 学科協議会・教授会に新カリキュラム案を提示する。		2012.10 2012.11	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 大学執行部からの、基本提案を待っている状態であるため。			
2013年度実施計画		達成時期	2013年度取り組み結果			
教務委員会で、新カリキュラム案を微調整する。 学科協議会・教授会で新カリキュラム再提案し承認する。 新カリキュラム案、大学評議会・理事会にて承認する。		2013.4 2013.5 2013.7	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014年度実施計画		達成時期	2014年度取り組み結果			
新カリキュラムを開始する。		2014.4	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015年度実施計画		達成時期	2015年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】「全学共通科目」は、教養教育のコアとされているにもかかわらず、必要単位数は学部により幅があり（0単位から20単位まで）、文学部、外国語学部、法学部、経営学部、環境創造学部では、教養教育のカリキュラムバランスの観点から検討が期待される。
点検・評価問題点	「全学共通科目」について文学部内の学科間においても必要単位数に幅がある。
改善方策	3-8-13(新規)「全学共通科目」について文学部において必要単位数、および共通受講科目を決める。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

この問題は、今回の認証評価で指摘され初めて認識したため、改善方策は現状では立てていない。

2011年度以降の課題とし、計画を練った。

所見	達成までに時間がかかり過ぎると思われるので、達成時期を前倒しにできないか、年次計画を再検討する。
----	--

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

従来のカリキュラム委員会を含む形で文学部教務委員会を新たに組織し、この問題について協議を始めた。同時に、全学的な対応について執行部にも問いかけたところ、現在の「全学共通科目」の平均履修単位数（約20単位）が示された。更に新年度早々に執行部の原案が提示される、ということが伝えられており、その案をもとに文学部の「全学共通科目」の必要単位数を決定したいと考える。

なお、現在の「全学共通科目」必要単位数は、日本文学科・中国学科・英米文学科は必修2単位、教育学科は選択必修12単位、書道は自由となっている。

所見	順調に次の段階に進んでいるものと思われます。今後、全学で調整をはかっていただけるものと期待します。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

執行部からは、「全学共通科目」の平均履修単位数（約20単位）が示されたのみである。執行部は、2013年度早々に具体的な提案を行うということである。それを待って、文学部教務委員会において原案を作成し、文学部の「全学共通科目」必要単位数を決定したい。その場合、各学科の必要性を十分協議し、数字上の無理な学部統一はしない方針である。

所見	ここまで進んだことを評価します。次の段階へ進めないということですが、事情は了解しました。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】学生の多様化に対応するため、外国語教育、入学前教育、導入教育におけるさらなる工夫が求められる。					
点検・評価問題点	学生の多様化に対応するため、外国語教育、入学前教育、導入教育におけるさらなる工夫を行わなければならない。					
改善方策	3-9-1 外国語教育、入学前教育、導入教育のより工夫した方法を検討し、具体化する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
なし				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				評価結果を受けて、改善方策を見直したため。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
文学部教務委員会で問題点を検証し、具体的な方策を作成する。 委員会案を各学科で検討する。 文学部教授会で承認する。			2011. 6 2011. 10 2011. 11	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 各学科で検討を行い、実施を開始した学科と、未だ調整中の学科があるため。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
カリキュラムなどに具体的に反映させる諸手続を行う。			2012. 12	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】学生の多様化に対応するため、外国語教育、入学前教育、導入教育におけるさらなる工夫が求められる。
点検・評価問題点	学生の多様化に対応するため、外国語教育、入学前教育、導入教育におけるさらなる工夫を行わなければならない。
改善方策	3-9-1 外国語教育、入学前教育、導入教育のより工夫した方法を検討し、具体化する。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

外国語教育では、2010 年度入学生より基礎教育科目（文学部共通）として「基礎英語 A」「基礎英語 B」「現代英語応用 A」「現代英語応用 B」を英米文学科を除いて開講した。英米文学科には 2011 年度入学生からのリメディアル教育にあたる「Basic English A」「Basic English B」を学則改正により開講する予定である。

入学前教育としては、中国学科と英米文学科でレポートを課しており、書道学科では臨書を課している。日本文学科と教育学科では次年度からの実施を検討中である。

導入教育としては、全学科で教員・上級生によるオリエンテーションおよび基礎ゼミ（必修）を実施している。

所見	2011 年度からの改善が進捗することを期待する。
----	---------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

外国語教育では、英米文学科が 2011 年度よりリメディアル教育である「Basic English A」「Basic English B」を開講した。

入学前教育・導入教育では、日本文学科が推薦入学予定者に対して日本文学に関わる基本図書のリストを提示し、レポートの提出を課することを開始した。1 年次「基礎演習」の授業において提出されたレポートに評価を加えて返却し指導することにした。教育学科は「学生にすすめたい 100 冊の本」を作成して合格者や学生に配り、指導することを計画している。書道学科は推薦入学の学生のみを対象としたので、2012 年度生には全入学予定者に課題設定をして推薦図書の読破を指示した。

所見	順調に進んでいることを評価したいと思います。
----	------------------------

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学科では、入学前教育・導入教育の一環として、「新入生導入教育・オリエンテーション委員」会のもと、前年度実施した計画を更に推し進め、公募制推薦・指定校推薦・一高推薦・スポーツ推薦・自己推薦で合格した入学予定者に対して、日本文学に関わる基本図書 23 点のリストを提示し、1 点 2000 字 3 作品について、それぞれの論作文の提出を課した。1 年次「基礎演習」担当教員が、この演習授業において提出されたレポートを、添削・論評し評価を加えて、返却し指導している。

【中国学科：A 完全に達成】導入教育のための学科独自のテキストの 2014 年度改訂に向けて、その委員会を設置し、改訂に関する議論を行っている。

【英米文学科】英米文学科では「Basic English A」「Basic English B」を開講し、学生の英語の基礎力向上を図っている。また英文学専攻科在籍の大学院生によるティーチング・アシスタント制度を導入し、多種多様な学生に対して個別指導を行っている。入学前教育・導入教育については指定校推薦、自己推薦、公募制推薦、大東文化大学第一高等学校推薦で合格した高校生に英語のテキスト、課題図書を与え、問題を課し、英米文学科教員が分担し、その指導に当たっている。

【教育学科】教育学科では、入学時ガイダンスの教員指導を強化し、キャリア教育指導を入学時から取り入れることを計画している。

【書道学科】書道学科では、入学前指導を昨年度から開始した。本年度はより積極的に取り組み、推薦入学予定者には 1 月初旬までに半紙三枚ほどの「王羲之蘭亭序」全臨と書道に関する書物を読む「読書感想文」1200 字を課した。1 月末に提出された 52 名の両課題に対し教員が手分けしてコメントを付して返却した。その際、二回目の課題として「空海風信帖」全臨と別の書道に関する「読書感想文」1200 字を課した。学力試験合格者にも同じ

課題を課した。二回目の課題は四月上旬に入学後に回収する予定である。

以上のように、五学科それぞれにおいて、当該課題について有効な対応がなされ、継続実施されている。

所見	計画の実施を評価します。その効果を確認しながら今後も継続的に実施されることを期待します。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】学部によっては教員配置の都合でカリキュラムの変更を余儀なくされ、主要な授業科目の一部を兼任教員に依存せざるを得ない状況が続いている。 【文学部】【総評】日本文学科、中国学科、教育学科では、全般的に兼任教員比率が高い。 【文学部】【総評】中国学科では専門教育の基礎となるべき概説科目についても兼任教員による講義が多いので改善が求められる。					
点検・評価問題点	学部によっては教員配置の都合でカリキュラムの変更を余儀なくされ、主要な授業科目の一部を兼任教員に依存せざるを得ない状況が続いている。 日本文学科、中国学科、教育学科では、全般的に兼任教員比率が高い。 中国学科では専門教育の基礎となるべき概説科目についても兼任教員による講義が多いので改善が求められる。					
改善方策	3-11-10(新規) カリキュラム見直し、開講コマの統廃合、補充人事等により専任教員が主要科目を担当するよう改善をすすめる。					
計画	前期		中期		後期	
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果			
なし			A 完全に達成 B 達成半ば ○ C 未達成 (B または C の理由) 評価結果を受けて、改善方策を見直したため。			
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果			
各学科において、検討を進める。		2011. 11	A 完全に達成 ○ B 達成半ば C 未達成 (B または C の理由) 教員定数の問題が根底にあるため、少人数教育を実施しようとすると、どうしても兼任教員に依頼しなければならないという状況がある。教員定数に達した学科は特任教員を新たに採用できる、という条件も加味しつつ、可能な限り専門教育を専任教員が担当できるように配慮はするが、困難な課題でもある。			
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果			
教職科目の開設数の整理統合などをはかる。 任期付き教員の採用等で専兼比率を改善する。		2013. 3	○ A 完全に達成 B 達成半ば C 未達成 (B または C の理由)			
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果			
			A 完全に達成 B 達成半ば C 未達成 (B または C の理由)			
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果			
			A 完全に達成 B 達成半ば C 未達成 (B または C の理由)			
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果			
			A 完全に達成 B 達成半ば C 未達成 (B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【全学】【総評】学部によっては教員配置の都合でカリキュラムの変更を余儀なくされ、主要な授業科目の一部を兼任教員に依存せざるを得ない状況が続いている。 【文学部】【総評】日本文学科、中国学科、教育学科では、全般的に兼任教員比率が高い。 【文学部】【総評】中国学科では専門教育の基礎となるべき概説科目についても兼任教員による講義が多いので改善が求められる。
点検・評価問題点	学部によっては教員配置の都合でカリキュラムの変更を余儀なくされ、主要な授業科目の一部を兼任教員に依存せざるを得ない状況が続いている。 日本文学科、中国学科、教育学科では、全般的に兼任教員比率が高い。 中国学科では専門教育の基礎となるべき概説科目についても兼任教員による講義が多いので改善が求められる。
改善方策	3-11-10(新規)カリキュラム見直し、開講コマの統廃合、補充人事等により専任教員が主要科目を担当するよう改善をすすめる。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】

日本文学科の専門専任教員数は、定数 11 名（設置基準 8 名）を上回る 13 名であるが、演習を中心とした少人数教育を徹底しているため、兼任教員に依存せざるを得ないのが現状である。今後、定数を目指すことになるが、コマ数の統廃合と兼任教員依存をどこまで減少させるかを検討中である。

【中国学科】

中国学科の教育・研究対象は中国に関する哲学・史学・文学の三分野にまたがり、この分野に対応するカリキュラムを組んでいる。対象とする分野が広いために多くの科目を設定する必要があるが、専任教員の定数は学則で定められており、専任教員一人当たりの持ちコマ数も教授会の取り決めて定められているので、専任教員が担当できない科目が多く存在することになる。その科目は兼任教員に担当してもらえない。従って兼任教員の比率が高くならざるを得ない。

【中国学科 2】

高校における漢文教育の時間数が減少し、新入生の漢文読解力や中国古典に対する知識の低下が見られる。また少子化の影響で基礎学力が昔に比べて低下した学生が入学してくる。これを補う対策として、中国学の基礎教育・初年次教育を学科の専任教員が可能な限り担当する様に配慮している。この余波で概説科目担当を兼任教員に委託せざるを得ない状況を作り出している。その根本原因は上記の如き近年の入学者の学力傾向と学則で定められた専任教員数・教授会で決められた専任教員担当コマ数にあり、一学科の努力で簡単に改善できるものではない。

【教育学科】

教育学科での兼任教員の占める割合が多いのは、幼稚園・小学校教職免許科目、図書館司書、社会教育主事、博物館などの資格科目がおおいためにやむをえないことと考えている。加えて、この間、教員定員が強引に削減されてきたことも悪影響している。しかし、2011 年度人事採用の専任教員 1 名、及び、2012 年度採用予定の 2 名の専任教員の補充によって一定の改善がなされる予定である。今後、2016 年までに多くの退職者が予定されているが、その機会に主要科目を専任教員が担当できるように一層改善していきたい。

【書道学科】

教員定数が定まっている現状では増員は単純には行かない。講座の統廃合の検討とコマ数の適正化を念頭に置いて、今後継続して検討する。

この問題は、今回の認証評価で指摘され初めて認識したため、2011 年度以降の課題とする。

所見	数字で状況を把握しながら具体的で実効可能な改善方策を立て、数値目標として達成できることを期待する。
----	---

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】

日本文学科の専門専任教員数は、定数 11 名（設置基準 8 名）を上回る 13 名であるが、2013 年度は 12 名、更に 2014 年度以降は定数の 11 名となる。このような厳しい将来を見据え、少人数教育をどこまで、あるいはどのように実施できるかを、新設の「日本文学科将来構想委員会」で検討することになっている。指摘の如く、兼任教員に依存せざるを得ないのが現状であるが、1 年次「基礎演習」、3.4 年次連年の「演習乙」「卒業論文指導」等、主要科目を専門専任教員が、大学院を外コマにしてまでも、6 コマ担当することで対処している。

【中国学科】

2011 年 3 月 31 日の現状と同じである。現状の改善は極めてむずかしいが、為しうることの模索が続いている。直接の改善には結び付かないが、概説科目や主要な授業科目を担当する兼任教員と積極的にコミュニケーションを取り、学科の教育方針をできる限り詳しく伝え、学科の意向が兼任教員の担当する授業に反映されるような取り組みを始めたところである。

【英米文学科】

英米文学科は、2011 年度から新カリキュラムが始まり、概ね順調に経過している。学科の主要科目である一年次開設のフレッシュマン・セミナー、三年次のゼミナール、四年次の卒業論文はすべて専任教員が担当している。

【教育学科】

教育学科で兼任教員の占める割合が多い理由については、2011 年の現状説明においておこなっている。教職科目の開設科目数の整理統合などをはかり、改善していきたい。また、2011 年度に 2 名の新任教員をむかえ、2013 年度以降 15 年までにさらに 8 名の退職者があり、8 名の新任教員をむかえる予定である。その中で、兼任教員率を減らしていきたい。

【書道学科】

2010 年度入学生より新カリキュラムが始まり 2 年次まで進んだ。科目の統廃合や内容の改変も徐々に実行されているが、完成までの途上である。

<主要科目の専任教員比率（2011 年 5 月 1 日基準日）>

	専門必修	専門選択	基礎必修	基礎選択
日本文学科	89%	57%	—	—
中国学科	63%	29%	34%	—
英米文学科	100%	58%	15%	—
教育学科	81%	71%	—	—
書道学科	85%	69%	30%	—

所見

人事の問題は時間がかかるものですが、目標を細分化して段階的に進めていただくと良いものと思います。

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学科の専門専任教員数は、定数 11 名（設置基準 8 名）を上回る 12 名である。2013 年 3 月末をもって 2 名の専任教員が定年退職し、新 2013 年度の新任教員が着任する。更に、2014 年度以降は定数の 11 名となる。このような厳しい将来を見据え、少人数教育をどこまで、あるいはどのように実施できるかを、新設の「日本文学科将来構想委員会」で検討しつつある。兼任教員に依存せざるを得ないのが現状であるが、学部内の他学科に比して兼任教員の依存割合は低い。1 年次「基礎演習」、3.4 年次連年の「演習乙」「卒業論文指導」等、主要科目を専門専任教員が、大学院を外コマにしてまでも、6 コマ担当することで対処している。

【中国学科：B 達成なかば】特任教員（任期付きの教員）を採用することで、専任の比率は維持できた。解説科目の整理・統合については、検討を続けている。

【英米文学科】英米文学科は、2011 年度から新カリキュラムが始まり、2 年間で経過し、概ね順調に進んでいる。学科の主要科目である一年次開設のフレッシュマン・セミナー、三年次のゼミナール、四年次の卒業論文はすべて専任教員が担当している。なお次年度から本学科の専任教員が 1 名増えるので、より目配りのきく教育ができると考えている。

【教育学科】教育学科は、資格関連科目を担当していることから兼任教員が多いのは仕方ない面があるが、2013 年度には、保育関係の特任教員を採用し、次年度の退職者にも速やかに対応し、専任教員を補充する予定である。

【書道学科】2010 年度入学生より新カリキュラムが始まり 3 年次まで進んだ。科目の統廃合や内容の改変も徐々に実行されており、次年度に完成年度を迎える。さらに新たなカリキュラムを検討するため、学科内にカリキュラム委員会を立ち上げ、教員配置を考えていく予定である。

<主要科目の専任教員比率（2012年5月1日基準日）>

	専門必修	専門選択	基礎必修	基礎選択
日本文学科	95%	59%	－	－
中国学科	72%	33%	35%	－
英米文学科	88%	51%	7%	－
教育学科	100%	59%	－	－
書道学科	85%	57%	30%	－

以上のように、五学科においては、主要科目の専任教員比率の改善がなされている。

所見	兼任比率の見直しとバランスの改善が進展していることを評価します。
----	----------------------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】科目についての詳しい履修指導に関して、特に2年次生に対するものが不十分な点は検討が望まれる。					
点検・評価問題点	1年次の履修結果の読み方解説と進級要件をあわせた履修指導が不十分であるため、2年次に取得すべき科目を取りこぼす学生が少なからずいること。					
改善方策	3-16-4(新規) 新たに2年次生を対象とした詳しい履修指導を行う。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
なし				☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
文学部教務委員会で学部共通の履修指導の方法を検討する。 文学部教授会で提示した上で、各学科で検討する。 各学科の意見を参考にして改正案を作成し、教授会に諮り承認を得る。			2011. 6 2011. 9 2011. 12	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由) 文学部教務委員会（カリキュラム委員含み改組）において、当該の課題について協議を重ねた。各学科いずれにおいても、新年度ガイダンスに当たり、教職員が重点的に履修指導に当たることを確認し、2012年度より実施の運びとなった。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
履修指導を実施する。			2012. 4	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由)		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
				☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】科目についての詳しい履修指導に関して、特に2年次生に対するものが不十分な点は検討が望まれる。
点検・評価問題点	1年次の履修結果の読み方解説と進級要件をあわせた履修指導が不十分であるため、2年次に取得すべき科目を取りこぼす学生が少なからずいること。
改善方策	3-16-4(新規) 新たに2年次生を対象とした詳しい履修指導を行う。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

文学部では1年次生についてはガイダンスなどを通して詳しい履修指導を行っているが、2年次生に対しては事務職員による通常の履修指導のみ行い、教員も加わった特別な履修指導は行っていない。しかし、教育学科を除く4学科では2年生から3年生に進級するときに進級規程を設けているので、2年次生に対する詳しい履修指導を行う必要がある。

所見	2011年度からの改善が進捗することを期待する。
----	--------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

日本文学科では、カリキュラム委員の教員が2年次生担当の「日本文学演習」など特別に履修指導を行っている。また、2012年度からは、5月に2年次生対象に演習委員の教員と4年次のゼミ生による「ゼミ説明会」並びに進級相談を行う。中国学科と英米文学科では、事務職員によるガイダンスに教員が加わることにした。教育学科では、「基礎演習1・2」において、必要な相談などを行っている。書道学科では、2年次のガイダンス等の機会をとらえて、進級に不安要素のある学生に対し、適宜担任を中心とした個別指導に当たっている。

また、2012年度より東松山校舎に文学部T Aルームを開設し、文学部生の履修および学習相談体制を強化する予定である。

所見	順調に進んでいることを評価します。
----	-------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学科では、カリキュラム委員の教員全7名が2年次生担当の「日本文学演習」など特別に履修指導を行っている。また、2012年度からは、5月に2年次生対象に演習委員の教員2名と各13分野の4年次ゼミ生による「ゼミ説明会」並びに進級個別相談を行った。

【中国学科：A完全に達成】昨年度と同様にカリキュラムを担当する教員が事務職員とともに履修説明をした。

【英米文学科】2年次生を対象とした履修指導としては、4月の2年生用のオリエンテーションに教員と事務職員が出向き、個別に指導を行っている。また主任と教務委員（英米文学科教員）が教務担当の事務職員との連絡を密に取り、学生の心身の問題などが起こった際に、敏速に配慮、対応するように努力している。

【教育学科】教育学科では、2012年度の1年生の履修状態について具体的に学科会議で議論し、問題点を確認した。2013年度初めの履修ガイダンスでは、履修指導が必要な学生を呼び出し、個別に教員が聞き取りをおこない履修指導を行う予定である。

【書道学科】書道学科では、前年度同様、2年次のガイダンス等の機会をとらえて、進級に不安要素のある学生に対し、適宜担任を中心とした個別指導に当たっている。また2名のT Aを配置し、月曜日以外、教員と合わせて対応できる措置を講じている。

以上のように、五学科それぞれにおいて、当該課題を克服するために、意欲的な取り組みが継続されている。

所見	計画が予定通り達成されたことを評価します。
----	-----------------------

改善方策実施計画書

担当部局： 文学部 責任者：文学部長 幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】履修登録単位数について、4 年次には上限がない、または上限が高いので、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。 【全学】【提言（助言）】1 年間に履修登録できる単位数について、全学部で4 年次に上限がない、または上限が高いことについて、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。 【文学部】【提言（助言）】1 年間に履修登録できる単位数について、全学部で4 年次に上限がない、または上限が高いことについて、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。					
点検・評価問題点	現在、大学では1 年間に履修登録できる単位数を概ね 40～44 単位としている。しかし、4 年次にはその上限がない。したがって、1 年間で 80 単位以上も取ることが不可能ではない。もしそのような取り方をするとすれば、本来の学修の目的を達成することは不可能である。					
改善方策	3-16-5（新規）4 年次においても何らかの上限を設ける。					
計画	前期		中期		後期	
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果			
なし			A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			（ B または C の理由 ） 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。			
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果			
文学部カリキュラム委員会において検討し、原案を作成する。 その原案を各学科で協議した上で、文学部教授会で協議し結論を出す。		2011. 6 2011. 12	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			（ B または C の理由 ） 文学部では、新たに教務委員会（カリキュラム委員会含み改組）を設け、この問題も年度当初より協議を重ねて来た。大学執行部の原案が 2012 年度初めに提示されるとのことであり、それとの調整の上で決定したいということになっている。			
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果			
実施する。		2012. 4	A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			（ B または C の理由 ） 全学的な調整が未達成である。			
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果			
学則に盛り込む。		2014. 3	A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			（ B または C の理由 ）			
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			（ B または C の理由 ）			
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果			
			A 完全に達成		B 達成半ば	C 未達成
			（ B または C の理由 ）			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【全学】【総評】履修登録単位数について、4年次には上限がない、または上限が高いので、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。 【全学】【提言（助言）】1年間に履修登録できる単位数について、全学部で4年次に上限がない、または上限が高いことについて、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。 【文学部】【提言（助言）】1年間に履修登録できる単位数について、全学部で4年次に上限がない、または上限が高いことについて、単位制度の趣旨に照らして改善が望まれる。
点検・評価問題点	現在、大学では1年間に履修登録できる単位数を概ね40～44単位としている。しかし、4年次にはその上限がない。したがって、1年間で80単位以上も取ることが不可能ではない。もしそのような取り方をするのであれば、本来の学修の目的を達成することは不可能である。
改善方策	3-16-5（新規）4年次においても何らかの上限を設ける。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

この問題は、今回の認証評価で指摘され初めて認識したため、2011年度の実施計画は立てていない。

2011年度以降の課題とし、計画を練った。

所見	2011年度からの改善が進捗することを期待する。
----	--------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

2011年度当初より、文学部教務委員会において、他大学の例なども参照し協議を重ねて来た。併せて、大学執行部に原案を提示するように働きかけてきたが、2012年度初めに原案を提示するとの回答を得ている。それを元に文学部における4年次の履修単位数上限について決定し、実施して行く予定である。

所見	改善方策の実行との関係について記述してください。
----	--------------------------

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

文学部においては、4年次の履修単位数上限を「49単位」に決定した。しかし、教職資格等の取得のためには、各学年ごとの履修シミュレーションを作成する必要があると判断し、学科ごとに取り組んだ。その結果、単位制度を損なうことのない「付帯条項」をつけることとなり、それをまとめることとなったが、この点に関し、執行部が、2013年度早々に、具体的な提案を行うということであり、それとの調整の上で、決定していきたい。

所見	おおむね計画が達成できたことを評価します。
----	-----------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【助言】【総評】教育・研究指導の改善のためのFDの組織的な取り組みが不十分であるので、改善が望まれる。					
点検・評価問題点	FD活動の意義や趣旨がすべての教員に周知されるところまでいっておらず、広報や討論などが今後の課題となる。とくに、兼任教員への連絡、その参加を図ることが課題である。また、各学科の取り組みを交流し、それを促進することが委員会のもうひとつの役割である。各学科については、その学科の教育内容や教員組織の特性などによって多様な取り組みが行われている。しかし、まだ未着手の学科もあり、学科での創造的な取り組みの開始がまたれる。					
改善方策	3-17-1、3-17-2、3-17-3 学部FD委員会の活動を継続・発展させる。授業公開、FD研究会、共通テキストの開発、兼任教員との懇談会、ニュースレター発行などを行う。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
文学部FD委員会で検討をする。			2010.6	A 完全に達成	○	B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由) 公開研究会を1回行った。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
FD委員会の作成した基本案を各学科で検討し、教授会に諮り、学部の承認を得る。			2011.11	A 完全に達成	○	B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由) 学部FD研究会を2回、授業公開を1回実施し、ニュースレターを2号発行した。「完全に達成」に近いが、兼任教員への浸透などの課題もあるので、Bとした。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
文学部FD研究会、ニュースレターの発行等を実施する。			2013.3	○	A 完全に達成	B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由)		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
				A 完全に達成		B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成		B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成		B 達成半ば
				C 未達成 (BまたはCの理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【助言】【総評】教育・研究指導の改善のためのF Dの組織的な取り組みが不十分であるので、改善が望まれる。
点検・評価問題点	F D活動の意義や趣旨がすべての教員に周知されるところまでいっておらず、広報や討論などが今後の課題となる。とくに、兼任教員への連絡、その参加を図ることが課題である。また、各学科の取り組みを交流し、それを促進することが委員会のもうひとつの役割である。各学科については、その学科の教育内容や教員組織の特性などによって多様な取り組みが行われている。しかし、まだ未着手の学科もあり、学科での創造的な取り組みの開始がまたれる。
改善方策	3-17-1、3-17-2、3-17-3 学部F D委員会の活動を継続・発展させる。授業公開、F D研究会、共通テキストの開発、兼任教員との懇談会、ニュースレター発行などを行う。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

2010 年度は、F D公開研究会「成績評価をめぐって」を 6 月に行い、専任教員だけでなく非常勤講師の参加を得た。研究会の内容は、①成績評価の実態や問題点についての意見交換、②G P Aについての情報提供であった。

所見	2011 年度からの改善が進捗することを期待する。
----	---------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

2011 年度は、学部F D研究会を 2 回開催し、「授業評価のあり方」「授業の工夫」「初年次教育」などのテーマで研究・討議を深めた。これらの内容を記録した「F D委員会ニュース」を 2 回発行し学部教員に配布した。また、これまでに日本文学科、中国学科、英米文学科、書道学科で初年次教育にかかわる共通テキストを刊行し、初年次教育や入学前指導に生かしている。授業公開を 1 回行い、ビデオで記録した。F D研究会には少数ながら非常勤講師も参加しているが、F D活動をどのようにしてより多くの非常勤の教員にまで浸透させるかは、今後の課題である。

学科レベルでは、上記共通テキストの発行などのほか、2011 年度に教育学科では「外国人留学生の教育・指導について」をテーマとして学科F D研究会を 1 回開催した。また、英米文学科では「授業の工夫」等に関する『かわら版』を随時発行し、教員間で交流している。

所見	順調に進んでいることを評価します。
----	-------------------

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

2012 年度は、前期にF D研究会を 1 回実施した。テーマは「初年次教育」で、これまでで最多の参加者を得た。また、その議論を記録するなどした「F D委員会ニュース」を 2 回発行した。

後期は学部独自のF D研究会を開けなかったが、全学のF D研究会（2013 年 2 月 25 日）に組織的に参加した。また、これをもとにした「F D委員会ニュース」本年度第 3 号を発行した。

各学科の取り組みも引き続き行われている。

所見	F D研究会の開催や参加などは評価しますが、2012 年の説明で述べられているように「F D活動をどのようにしてより多くの非常勤の教員にまで浸透させるかは、…」といった課題は未解決であると思われます。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局： 文学部 責任者：文学部長 幹事：文学部事務室

2011年3月31日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】成績評価基準が具体的でないなど、シラバスの記載に精粗があるので、改善が望まれる。 【文学部】【提言（助言）】シラバスの記載に精粗があり、特に成績評価基準が不明確なものが散見されるので、改善が望まれる。							
点検・評価問題点	現在大学においてはシラバスの記載について一応の書式（電子シラバスのフォーマット）は決まっているが、その記載内容の基準は大学においても文学部においても必ずしも明確ではない。							
改善方策	3-17-6(新規) シラバスの記載内容の基準を設け、サンプルを作成する。							
計画	前期		中期		後期			
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度		
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果					
なし。			☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。					
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果					
文学部カリキュラム委員会において検討し、原案を作成する。 その原案を各学科で協議した上で、文学部教授会で協議し結論を出す。		2011. 12	☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由) 認証評価に関する将来構想・改善方策検討WG原案のシラバスが提示されたが、文学部においては、数点において更に協議を重ねる必要があり、次年度決定し実施する運びとなっている。					
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果					
文学部教授会のシラバス作成基準をまとめ、シラバス改善検討プロジェクト委員会との協議も経た上で、実施する。		2012. 12	☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由)					
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果					
			☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由)					
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果					
			☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由)					
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果					
			☐	A 完全に達成	☐	B 達成半ば	☐	C 未達成
			(B または C の理由)					

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【全学】【総評】成績評価基準が具体的でないなど、シラバスの記載に精粗があるので、改善が望まれる。 【提言（助言）】【総評】シラバスの記載に精粗があり、特に成績評価基準が不明確なものが散見されるので、改善が望まれる。
点検・評価問題点	現在大学においてはシラバスの記載について一応の書式（電子シラバスのフォーマット）は決まっているが、その記載内容の基準は大学においても文学部においても必ずしも明確ではない。
改善方策	3-17-6(新規) シラバスの記載内容の基準を設け、サンプルを作成する。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

この問題は、今回の認証評価で指摘され初めて認識したため、2010 年度の実施計画は立てていない。

2011 年度以降の課題とし、計画を練った。

所見	2011 年度からの改善が進捗することを期待する。
----	---------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

学長より、シラバス記載の統一基準として、「2012 年度シラバス記入例」が全学的に示され、これに基づいて記入することが要請されたが、文学部の意見の調整を更に行う必要があるということを文学部教授会で確認した。次年度に、指摘された事項を含む改革を行い、実施する予定である。

所見	順調に進んでいることを評価します。
----	-------------------

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

新たに示された「2013 年度シラバス記入例」に基づき、各教員が執筆した。それを文学部事務室（第一次）、各学科教務委員（第二次）が点検をした。その結果、2014 年度に向けて、更に文章修正を依頼（命令ではない）した方が良いと思われる例については、その方向で進めることを教授会において確認した。

所見	計画通り改善が進んだことを評価します。
----	---------------------

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】中国学科と書道学科は、現地研修、学術交流の推進など積極的に取り組んでいる。これに比べると、他の3学科はやや不活発である。					
点検・評価問題点	日本文学科、英米文学科、教育学科は、中国学科、書道学科に比べて、たしかに現地研修、学術交流の推進などにおいてやや不活発である。					
改善方策	3-19-13(新規) 国際交流を積極的に推進する実施計画を策定する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
なし				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 評価結果を受けて、改善方策を見直したため。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
日本文学科、英米文学科、教育学科において、現状の問題点の検証と改善策を検討する。			2011. 9	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 文学部教務委員会において、協議を開始した。英米文学科では学生の語学研修も盛んであり、派遣留学の学生も毎年複数いる。日本文学科と教育学科においても、交流は一定程度なされている。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
具体化に向けて大学の関係部署と相談し、実施計画を作成する。			2013. 3	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 日本文学科・教育学科における「現地研修」は馴染まないのではないかとこの観点から、課題自体の再検討をする必要があると判明した。他の3学科においては、充実した取り組みがされており、学部全体として見た場合、既に達成されているとみることができる。		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】中国学科と書道学科は、現地研修、学術交流の推進など積極的に取り組んでいる。これに比べると、他の３学科はやや不活発である。
点検・評価問題点	日本文学科、英米文学科、教育学科は、中国学科、書道学科に比べて、たしかに現地研修、学術交流の推進などにおいてやや不活発である。
改善方策	3-19-13(新規) 国際交流を積極的に推進する実施計画を策定する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。

【日本文学科】現地研修が国外を指し示すものであるというならば、日本文学科は、文学部の中でも中国学科や書道学科や英米文学科とは事情が大きく異なる。国内をいうのならば３・４年連年のゼミ合宿などで積極的に行われている。また、国際的な学術交流では海外からの研究員受入れと専任教員の海外留学を積極的に行っている。

【英米文学科】英米文学科では、夏季・春季休暇を使った海外短期研修への参加（H22年度８名）、またネイティブスピーカーの講師による集中講義「英語・文化コミュニケーション演習１」（H22年度９名履修）を国内留学と位置づけて開講している。

【教育学科】教育学科の特質からして、一定の地域を決めて現地研修することは考えにくい。しかし、それぞれの教員においては、国際的な学術交流を積極的におこなっている。教育学科の教員は、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ロシア、デンマーク、中国、韓国、タイ、インドネシアなどの地域と研究機関と密接な交流を持って研究活動を展開している。今後は、こうした世界各国との交流をネットワーク化し、あるテーマに集約した研究交流を組織化していくことを検討していきたい。大学として「国際交流援助基金」などを準備して、学部学科の取り組みを積極的に援助していく方策をとるべきである。

所見	日本文学科、英米文学科、教育学科の問題点を検証し、それに対する改善計画を策定して、着実に改善を進めてください。
----	---

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

三学科（日文・英米・教育）の実情は、指摘された観点においては、それぞれやや異なる点があると考えられる。学生と教員は区別して考えるべきかとも思われる。ここ数年、日本文学科ではフランス・イギリス（２名）・ドイツへ、中国学科ではドイツへ、教育学科ではデンマーク、ドイツ、イタリア（2012年度予定）へと、教員のヨーロッパにおける長期海外研修（１年間）が行われており、現地での相互の特別講義、学生指導、刊行物の交流なども行われている。日本文学科には、北京外国語大学の教員が来日して研究活動を行い、中国学科には、中国の大学から数人の教員が来日して大学院を含む専門分野のゼミに参加するというように、異文化コミュニケーションが実地に行われ、学生・院生への刺激が多大であった。中国と英米・書道の学生が行う「現地研修」は、日文・教育の学生にとってはどのような形になるのか、という検討を含み、更に今後協議を重ねて行きたい。

所見	教員の交流については順調に進んでいることを評価します。学生の交流を推進する方策があれば記述してください。
----	--

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

【英米文学科】英米文学科では、学科生に夏期・春期を使った海外短期研修プログラムへの参加を強く勧めている。またネイティブスピーカー講師による集中講義「英語・文化コミュニケーション演習１」を国内留学と位置づけて開講している。さらに、ペンブルック・プレイヤーズ（ケンブリッジ大学）によるシェイクスピア劇日本公演の開催地となり、両校の学生の交流を進めている。

【教育学科】各教員は、海外研修を頻繁に行っているが、学科として学生の研修を行っているわけではない。

当該課題について、日本文学科・教育学科における「現地研修」（学生が諸外国に行って研修する）ということについては馴染まないと考えられる。他の 3 学科においては、充実した取り組みがなされているので、学部全体としては、今後も 3 学科を中心とした取り組みを継続していきたい。

所見	計画がほぼ順調に進んでいることを評価します。確かに教育学科や日本文学科などは海外現地研修には馴染まないように思われます。今後は各学科の特徴に合わせた計画に修正することが望ましいと思われます。
----	---

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2011年3月10日

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】海外からの留学生の受け入れは2名にとどまっている。					
点検・評価問題点	海外の留学生に門戸を開いているものの、海外からの留学生の受け入れは2名にとどまっている。					
改善方策	3-19-14(新規) 海外の協定校に積極的にはたらきかけ、海外からの留学生の受け入れを推進する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果			
なし			A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			(B または C の理由) 評価結果を受けて、改善方策を見直したため			
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果			
文学部内に入試委員会などを設けて、現在の問題点の検証と改善策を検討する。	2011. 11		A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と、続く福島原発事故の影響が大きく、既に滞在していた留学生の帰国もあり、新たに留学生を受け入れることは困難を極めた。だが、今後更に検討を進めたい。			
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果			
具体化に向けて大学の関係部署(入試課や国際交流センターなど)と相談し、実施の方途を作成する。	2012. 11		A 完全に達成	○	B 達成半ば	C 未達成
			(B または C の理由) この課題設定自体について、再度検討をしていく必要性を感じている。			
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果			
新たな検討結果に基づいて、実施方策を協議する。	2013. 11		A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【文学部】【総評】海外からの留学生の受け入れは2名にとどまっている。
点検・評価問題点	海外の留学生に門戸を開いているものの、海外からの留学生の受け入れは2名にとどまっている。
改善方策	3-19-14(新規) 海外の協定校に積極的にはたらきかけ、海外からの留学生の受け入れを推進する。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。

2010 年度 4 月から 12 カ月間での受入れは 1 名、2010 年度 9 月から 12 カ月間での受入れは 4 名であった。

所見	2011 年度からの改善が進捗することを期待する。
----	---------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

留学生の受け入れについては、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災及び福島原発事故の影響が大きく、種々の困難があった。今後、懸念される材料を減少させ、留学生の来日を働きかけるための方策について、協定校を中心に信頼関係の確立をはかる等、更に協議を重ねて行く。

なお、2011 年度 4 月からの受入れは 1 名（12 ヶ月）、2011 年度 9 月から受入れは無かった。2012 年度 4 月からの受入予定は 3 名（内 1 名は 5 カ月）である。

所見	予期せぬ災害の影響が大きいことは残念ですが、今後の働きかけに期待します。
----	--------------------------------------

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】留学生は 2 名の入学に留まり、日本文学、ことに古典文学などよりも、むしろ日本語学への希望が多いのが現状である。海外からの留学生は今後も多くは望めないであろう。

【中国学科：B 達成半ば】中国における中国学振興策によって、中国国内の受入枠が大きくなり、日本に留学して中国学を学ぶ学生が減少している。そうしたなかで、どのように受入人数を増やすか、方法を模索中である。

【英米文学科】今年度、英米文学科ではフィンランドからの交換留学生 2 名を受け入れた。今後も留学生受け入れを推進する努力をしてゆく所存である。

【教育学科】外国人留学生は 4 学年計 11 名おり、ほぼ毎年 2 名程度、継続的に受け入れている。

【書道学科】書道学科では、「学術交流協定校」である、国立台湾芸術大学と天津美術学院から、通常毎年 1 名ずつを交換留学生として受け入れている。とくに 2012 年度は、両大学からの希望要請があり、台湾 2 名、天津 2 名を積極的に受け入れた。

2012 年度 4 月からの受入れは 3 名（フィンランド 2 名→英米 12 ヶ月と 5 ヶ月、中国→書道 12 ヶ月）、2012 年度 9 月から受入れは 4 名（中国→日文 12 ヶ月、中国→書道 12 ヶ月、台湾 2 名→書道 12 ヶ月）であった。2013 年度 4 月からの受入予定は 1 名（台湾→日文 5 カ月）である。

文学部への留学生の受入が順調に進まない理由は、留学生の日本語能力の問題も大きい。文学部の各専門は、日本語教授を本来の目的とするものであるとは必ずしも言えないために、この課題自体について、再検討する必要もあると判断している。

所見	個々の学部では対応に限界がある課題ですが、今後も留学生数の推移を見守っていくことが必要かと思われます。
----	---

